

須恵器長頸瓶の製作技法

—山形県内の窯跡出土資料から—

吉田 江美子

1 はじめに

須恵器について中村浩は、専門工人によって生産された規格性（形態や手法）をもつ手工業品であり、かつ一定の時代の変化とともに微妙に変化することをその特徴としている（中村 1993）。その特徴のひとつが手法つまり製作技法で、坏に見られるヘラ切りから糸切りへと変化する底部切り離し技法がその代表であろう。山形県内の須恵器出土資料においても、坏の底部切り離し技法の変化は土器編年上すでに重要な指標のひとつとなっている（阿部・水戸 1999）。しかしその他の器種については製作技法の変化を含むそれらの持つ規格性について、これまで検討があまり進展していない。そこで本稿では山形県内の複数の窯跡で生産されたことが確認されている、そして他地域でもその研究が進展している長頸瓶について取り上げる。特にその製作技法の変化について考察を行う。

2 瓶類の製作技法

ここでは瓶類における製作技法とその名称を定義づけるためにもその概略を述べる。今回瓶類の製作技法として以下の閉塞技法（風船技法）と開口技法の二方法に分類する。また三段構成の製作技法は円盤閉塞法のみ、二段構成の製作技法は回転絞り閉塞法と開口技法の二種に分類する（表 1）。

（1）閉塞技法（風船技法）によるもの（第 1 図 平尾 2001）

閉塞技法とは瓶の体部内の空気圧を利用し意図的に器形の変形を行える、あるいは意図しない器形の変形（ヘタリ）防止が出来ることにより作業の効率化を図った技法とされる（笹沢 2001）。

① ロクロの上に粘土円盤を据え、粘土を輪積みした後

② 所定の高さまで挽き上げた後に開口部を狭めてゆく（第 1 図 4～5）。

③ 体部を閉塞する（第 1 図 6）。その方法として以下の二方法がある（第 3 図 北野 2001a）。

・別作りの粘土円盤を上部に被せ密閉する。

→三段構成（円盤閉塞法）

・更に上方に伸ばし絞り切って密封する。

→二段構成（回転絞り閉塞法）

④ 体部内の空気圧を利用し、コテで圧力を加え体部の成形（加圧変形）や、接合部分の調整を行う（第 1 図 7～8）。

⑤ ある程度乾燥させ、底部に高台をつける（第 1 図 9）。

⑥ 胴頂部の頸部との接合部分を切り取って穴を開け、口頸部を形成する粘土紐を接合する（第 1 図 10～11）。

⑦ 口頸部を形成する（第 1 図 12～13）。

⑧ 乾燥後焼成する（第 1 図 14）。

（2）開口技法によるもの

閉塞技法の痕跡が見られない、開口技法と推測されるものについて二方法に分類する。ひとつは閉塞せずに狭めた開口部に別作りの口頸部を接合した二段構成のもの

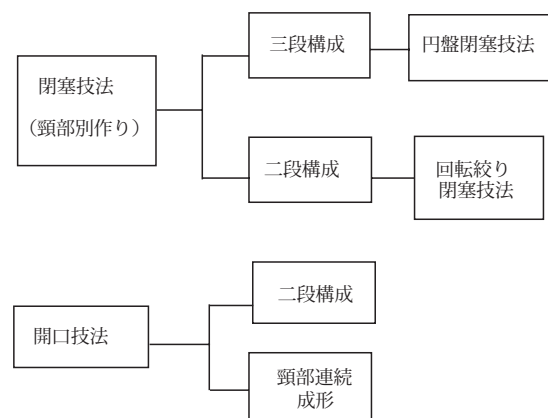


表 1 長頸瓶製作技法概要

である。またひとつは9世紀以降小瓶を中心に出現する技法として胴頂部から口縁部まで連続して成形する技法がある(笹沢 2001)。

3 研究史

横山浩一は、瓶類の頸部別作りの技法の発生についてロクロの回転力の弱さ、あるいは工人の技術不足の結果としている(横山 1959)。また檜崎彰一はロクロの技術が向上した結果、古代において瓶類が三段構成から二段構成へと技法が移行したとしている(檜崎 1961)。田辺昭三は長頸瓶において三段構成が奈良時代まで、二段構成は平安時代以降の技法とし、その理由としてロクロの回転力の向上を挙げている。しかしその一方で陶邑 TK217 号窯出土の平瓶にみられる回転絞り閉塞法の例を示している(田辺 1981)。北野博司は、陶邑の例や石川県内の6～7世紀の出土資料より、すでに古墳時代には回転絞り閉塞法を行える水準にあり、よって円盤閉塞法から回転絞り閉塞法への移行は新技術導入という性格ではなく器形変化に即した結果としている(北野 2001a)。また笹沢正史も製作技法の移行の理由として、長頸瓶の器形が胴部の成形に加圧変形を必要とする『算盤形(角肩・扁平形)』から、加圧変形を必要としない『球胴形』、そして『卵形』に変化したことを挙げている(第2図)(笹沢 2001)。また一方で尾野善裕は猿投窯で「二段構成」化が進んだ要因として高級品である施釉陶器の生産に伴い回転軸の振れの少ないロクロへの改良が回転絞り閉塞が行いやすい土器製作の環境を作ったと指摘している(尾野 2001)。古代の土器研究会シンポジウムにおいて、全国的傾向として三段構成の円盤閉塞技法は7世紀前半に使われはじめ、8世紀代までは主体であった。地域差はあるもののその後9世紀前半を境に二段構成の製作方法に移行する傾向にあるとの見解がなされている(古代土器研 2001)。

4 山形県内で生産された須恵器長頸瓶

では、古代の山形県において生産された長頸瓶などの瓶類の製作技法の傾向を窯跡資料で検討する。遺跡の位置は第4図、所在地は表2に記した。また遺物実測図は第5図に記載し、その各遺物についての詳細は表3に記している¹⁾。

山形県内陸部では3遺跡、日本海側の庄内地方では4遺跡、計7遺跡を対象とした。なお、今回使用する資料は、窯体・灰原・捨て場から出土した、胴部閉塞部分が実見できる、または明確な資料を対象とした。よって上記以外の遺構からの出土遺物、閉塞部分が欠損している、あるいは完形品で内部閉塞部分が確認できないものについては省略したが、一部はその限りではない。また、7遺跡のうち現在まで報告書が刊行されているのは5遺跡であり、現在整理作業中・報告書未刊行の2遺跡については本稿では文章のみの報告とする。今回遺跡の概要及び遺構の詳細については省略し、以下この章においてはカッコ内の数字に関してことわりがないものは全て第5図の実測図番号とする。

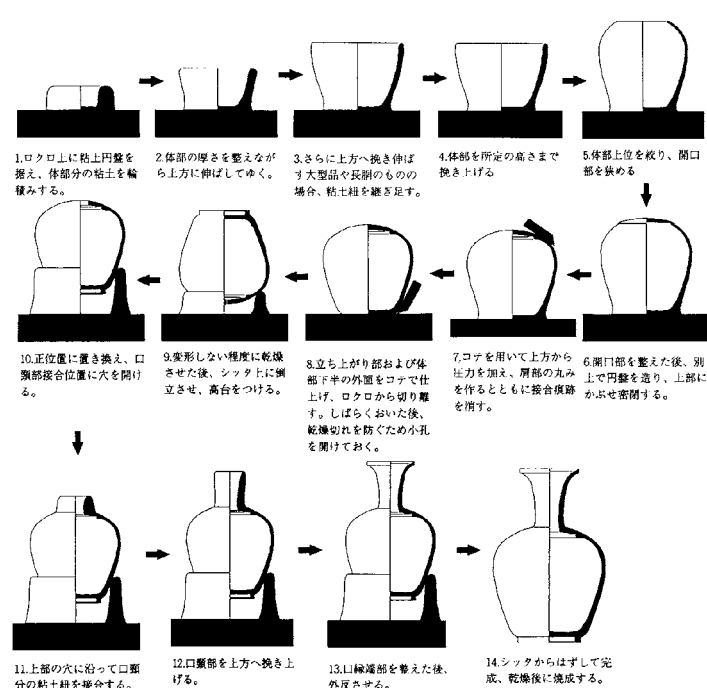
(1) 合津窯跡

8世紀後半から末葉と想定される窯跡の灰原から円盤閉塞法によって製作された長頸瓶が出土している²⁾。

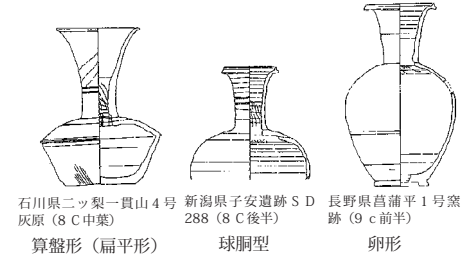
(2) 平野山窯跡群遺跡 第12地点

第2次調査の灰原より出土している。(2)、(3)、(5)、(6)のいずれも円盤閉塞痕が切り取り部分より半径10mm以上大きく、円盤閉塞法を使用したことが明瞭である(写真2)。(1)については一部頸部切り取り部分に閉塞痕が切られているがやはり明瞭に円盤閉塞痕が残っている(写真1)。また(2)と(5)について頸部接合部分は欠損しているが、円盤閉塞法で製作していることから頸部については別作りと推定できる。器形については、8世紀代の(1)の場合はやや小型で肩に丸みを帯びているが、『扁平型』に類似しているといえよう。9世紀代中頃の(5)、(6)は『卵型』、(2)、(3)についても報告書では年代は不明であるが(5)、(6)と大きく年代差はないと思われる。いずれも全国的な傾向と同様と言えよう。長頸瓶については器形の変化とは関係なく同じ技法で製作されていたと考えられる。ただし、(4)の小瓶については閉塞部分、頸部接合がないため製作技法は不明である。しかし、頸部付近内面に若干の螺旋状の皺が見られ、胴部外部にはコテによる調整等が見られないため閉塞法を使っていない可能性がある。

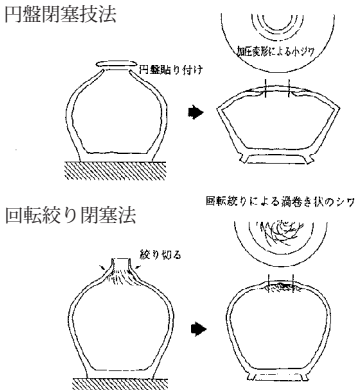
(3)、(5)については頸部付け根に環状の凸帯が見られる。丁寧に成形し仕上げるなど装飾性の高さが感じられる。なお、環状凸帯付長頸瓶については、奢侈品もしくは儀器用品としての意味合いが強く、有力者や機関



第 1 図 体部を形成する瓶類の製作工程概念図（平尾 2001）



第 2 図 長頸瓶の器形（笹沢 2001 より一部抜粋）



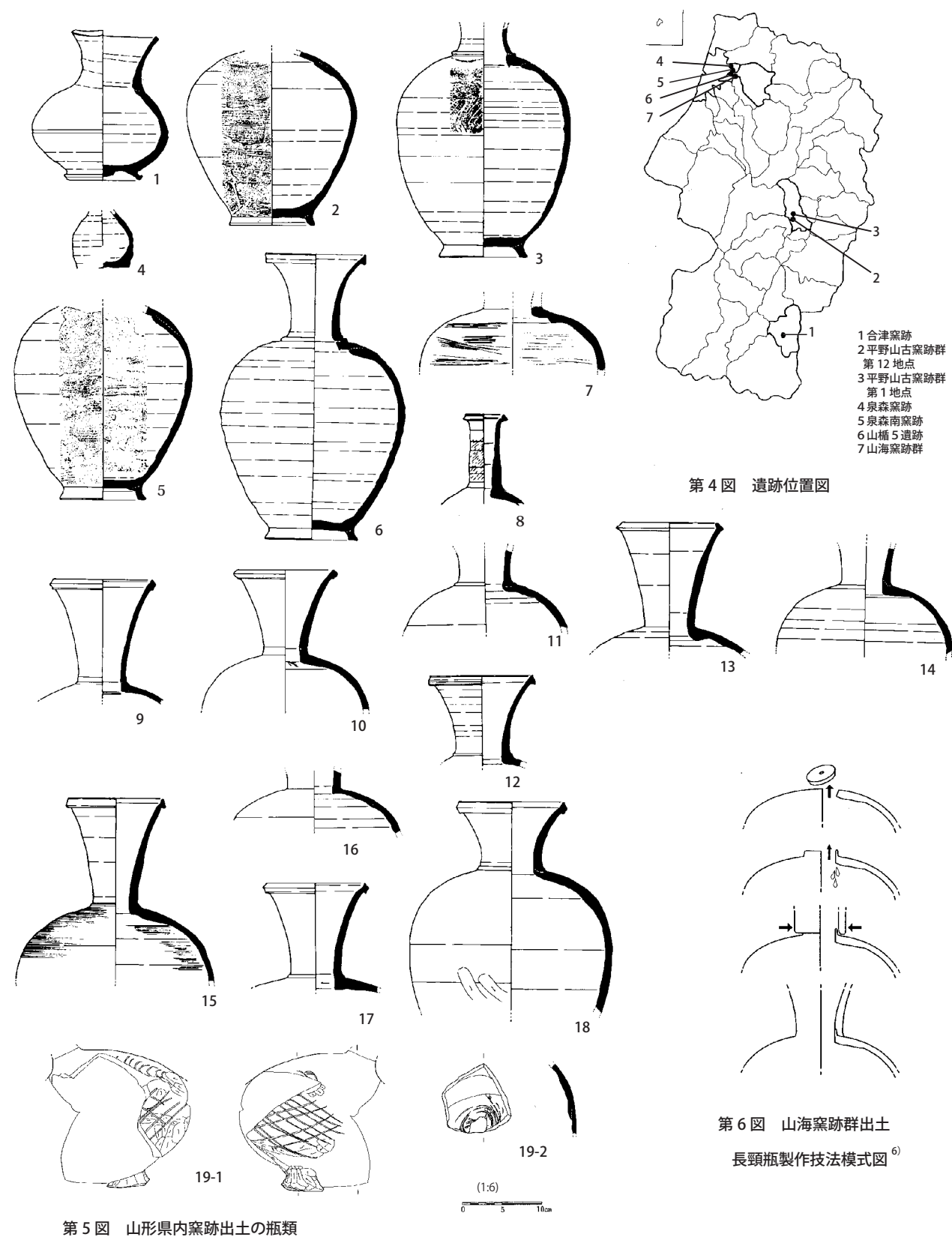
第 3 図 風船技法の二種（北野 2001a）

遺 跡 名	所 在 地
1 合津窯跡	東置賜郡高島町大字上和田字合津
2 平野山古窯跡群第 1 2 地点	寒河江市大字芝橋字高松ほか
3 平野山古窯跡群第 1 地点	寒河江市高松平野山
4 泉森窯跡	酒田市大字生石字泉森
5 泉森南窯跡	酒田市大字生石字泉森
6 山楯 5 遺跡	飽海郡平田町山楯
7 山海窯跡部	飽海郡平田町大字山谷新田字山海

表 2 遺跡所在地

遺跡名	図	出土遺構	閉塞技法	頸部	年代	凸帯	閉塞痕溪	出典
合津窯跡	-	-	円盤閉塞	別作り	8C 4/4	無	-	高島埋 5
平野山古窯跡群	1	灰原 P ブロック	円盤閉塞	別作り	8C3/4	無	-	山埋セ 52
第 12 地点遺跡	2	灰原 G ブロック	円盤閉塞	(別作?)	不明	不明	72	山埋セ 52
	3	灰原 G ブロック	円盤閉塞	別作り	不明	有	102	山埋セ 52
	4	灰原 G ブロック	(連続?)	(連続?)	不明	無?	-	山埋セ 52
平野山 (第 2 次)	5	灰原 H ブロック	円盤閉塞	(別作?)	9C2/4	不明	90	山埋セ 52
	6	灰原 H ブロック	円盤閉塞	別作り	9C2/4	有	78	山埋セ 52
平野山第 1 地点	7	捨て場	円盤閉塞	(別作?)	9C2/4	不明	78	寒市教委
山楯 5 遺跡	8	捨て場	(円盤?)	別作り	9C1/4	無	72?	山埋セ 4
	9	S Q 1	円盤閉塞	別作り	9C3/4	有	48	-
	10	S Q 1	(円盤?)	別作り	9C3/4	無	-	-
	11	S Q 1 捨て場	(円盤?)	別作り	9C3/4	有	-	県教 170
	12	S Q 1 捨て場	(円盤?)	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
山海窯跡群遺跡	13	S Q 1 捨て場	(円盤?)	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
(第 1 次調査)								
	14	S Q 1 捨て場	(円盤?)	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
	15	S Q 1 捨て場	(円盤?)	別作り	9C3/4	有	-	県教 170
	16	S Q 3 窯体内	(回転絞?)	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
	17	S Q 4	(円盤?)	別作り	9C3/4	有	-	-
	18	S Q 4 捨て場	(円盤?)	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
山海 (第 2 次)	19	S Q 8 捨て場	円盤閉塞	-	9C3/4	-	20 ~ 4	県教 172

表 3 遺物一覧表



の所持品とされる（利部 1998）。

（3）平野山窯跡群遺跡 第1地点

9世紀前半。捨て場から（7）が出土している。円盤閉塞痕が切り取り部分より半径10mm以上大きく、円

盤閉塞法を使用したことが明瞭である。体部上部のみの残存のため全体の器形は不明だが『球胴型』あるいは『卵型』と思われる。

（4）泉森窯跡



写真1 (第5図1)



写真2 (第5図3)

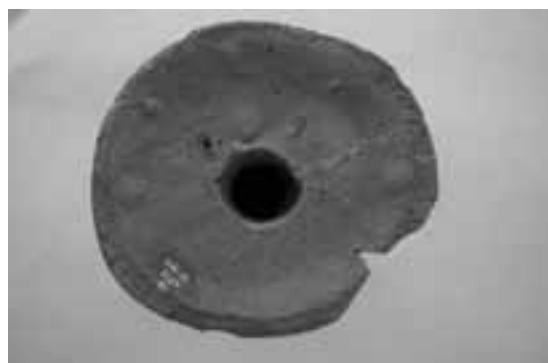


写真3 (第5図8)



写真4 (第5図9)

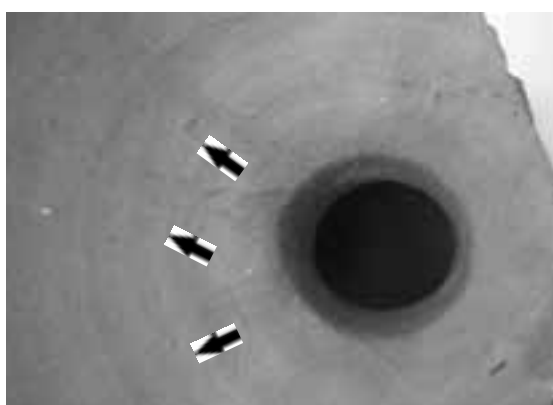


写真5 (第5図10)



写真6 (第5図16)



写真7 (第5図17)

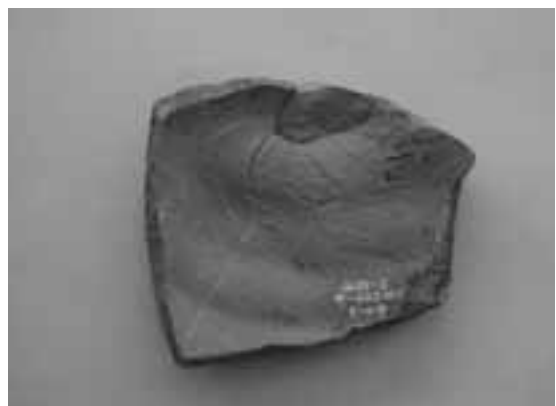


写真8 (第5図19-2)

9世紀前半の窯跡。円盤閉塞法・頸部別作りの長頸瓶が灰原から出土している。なお、報告書刊行は平成15年度予定であり、詳細は刊行を待ちたい。

(5) 泉森南窯跡

9世紀前半の窯跡。円盤閉塞法・頸部別作りの長頸瓶が灰原から出土している。なお、報告書刊行は平成15年度予定であり、詳細は刊行を待ちたい。

(6) 山楯5遺跡

9世紀初頭。灰原から水瓶(8)が出土している。体部は頸部別作りの円盤状に残存しており、環状に剥離したと思われる痕跡が認められる(写真3)。そのことから円盤閉塞法によって製作されたものと思われる。

(7) 山海窯跡群遺跡

9世紀後半。この遺跡においては、円盤閉塞の痕跡があるのは(9)のみで、それについても円盤閉塞痕は切り取り部分より半径2～4mm大きい程度である(写真4)。(10)～(18)では円盤閉塞痕は確認できず、個体差はあるものの胴頂部内部に渦巻状の皺がそれぞれで確認できる(写真5～7)。しかし、円盤閉塞である(6)でも同様の渦巻状の皺がみられ、必ずしも回転絞り閉塞のみに渦巻状の皺が現れるとは限らない³⁾。

また、遺跡からは鳥型土製品(19-1)が出土しているが、その胸部と思われる部分に存在する閉塞部分(19-2)を見てみると、直径20～40mm前後の楕円形の円盤閉塞痕が見られ、渦巻状の皺の後に加圧変形の際に出来る同心円の皺が形成されたことが確認できる(写真8)。そのことから、円盤閉塞径が他の窯跡のものよりも小さく頸部切り取り径の方が大きいこと、円盤閉塞技法においても渦巻状の皺が出来ることを示している。そして、(10)～(15)、(17)は胴頂部付近が他の器壁より厚みがあることから円盤閉塞を行った可能性が高い。その場合、切り取り径より円盤閉塞痕が小さかったため現状では確認できないものと思われる。

それに対し(16)については、胴頂部に近づくにつれて器壁が薄くなっているため回転絞り閉塞法の可能性が高い(写真6)⁴⁾。

このように閉塞法は明確ではないが、(10)～(17)については頸部付け根内部に切り取り痕等があるため頸部接合の際に切り取られたとみられ、胴頂部を切り取る風船技法のいずれかによって製作されたといえる。(18)

について、頸部は別作りであるものの、頸部接合部内面が丸く整えられているため閉塞・開口技法両方の可能性がある。しかし胴頂部の器壁に厚みがあることから円盤閉塞法とも考えられる。

また山海窯跡群の製作技法の特徴としてあげられるのが、頸部の接合技法である。比較した場合平野山窯跡群のものは頸部と胴部の接合面が水平(横)方向の1面である。しかし山海窯跡群のものについて、頸部との接合面が垂直(縦)・水平(横)方向の2面になっていることが土器断面より観察できる。頸部接続部分の胴頂部内側を引き出し、2面で接合することによってより接合を強化することが目的と推測される。この方法について胴部切り取り部分内部を水で柔らかくして引き出していると思われ、その痕跡として(10)の胴部内面に水滴痕が残っている(第6図)(写真5。矢印は水滴の方向)。それにあらかじめ大きめに作った頸部を絞りながら引き出し面に接合させていったものと思われる⁵⁾。

また(9)、(11)、(15)、(17)について頸部付け根に環状凸帯が見られるものの、細い粘土紐を貼り付けて簡易な調整を行ったものと思われ、平野山古窯跡群のそれと比較して環状凸帯が形骸化している様子がうかがえる。

山海窯跡の長頸瓶の器形については、今回使用した資料からのみでは不明であるが、他の完形品に近い資料からみて、器形はなで肩であり卵型に近いと考えられ、9世紀後半のものとして全国的な傾向と同様な器形と思われる。

(8) その他

以下の窯跡からも長頸瓶が出土しているものの、体部の欠損等で製作技法が不明なことより、今回の集成から除外した。

- ・願瀬山第1号窯跡(酒田市大字生石字柳沢・9世紀初頭)(佐藤・佐藤1971)
- ・久保手1号窯跡(上山市久保手四ツ谷、地藏堂・9世紀初頭)(上山市教委1983)

5 まとめ

今回は、山形県内の長頸瓶の窯跡資料において、最も古いものである8世紀第3四半期から最も新しい9世紀第3四半期までのものを集成した。その結果器形に関し

ては『扁平形』から『球胴型』あるいは『卵形』へ変化しており、他地域と傾向は同様といえよう。しかし、長頸瓶の製作技法については8世紀から9世紀前半まで、あるいは9世紀後半に入っても円盤閉塞技法を主に使用したと思われる。山海窯跡では回転絞り閉塞法と思われる長頸瓶（第5図16）が1点存在するものの、それはマイナーな存在であり、あくまでも主流は円盤閉塞法によるものと推測される。前記の通り北野氏は器形の変化により製作技法が変化したとしているが、県内の長頸瓶については器形が変化しても従来の円盤閉塞による製作技法で製作していたと思われる。しかし、それと同時に、全国に波及しつつあった回転絞り閉塞法が導入されつつあった過渡期の状態であることを示しているのではないだろうか。また、窯の工房内においても製作技法を統一すべきという制約はなかったことが考えられる。これは8世紀後半～9世紀前半の猿投系須恵器窯跡でも長頸瓶の製作技法が三段構成と二段構成の長頸瓶が同時期に存在し、そして徐々に三段構成から二段構成へと移行していく様子が見られる（尾野 2001）。

だが、今回回転絞り技法が存在するのは山海窯跡の第

5図16の1点のみであり、この窯特有の傾向である可能性とも考えられ、県内で9世紀後半に長頸瓶の製作技法の変化が見られたとするのは性急かもしれない。今後同時期の集落等の資料を含め考察を重ねていく必要があるだろう。

最後に本稿を執筆するにあたり北野博司氏に多大なるご教示をいただいた。また山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館ならびに竹田純子氏には資料の実見に際しご尽力いただいた。紙面を借りて謝意を申し上げる。

註

- 1) 遺物について。第5図において、縮尺は1／6で掲載している。報告書にて白抜きで掲載されていたものについては加筆を行った。第5図9、10、19-2は報告書未掲載のため本稿を作成するにあたって作図した。19-1については改めて作図した。また、表3について、推定される部分についてはカッコ書きとした。遺物の年代については報告書に従った。
- 2) 報告書において資料は写真でのみ報告・掲載されているため、本稿においては図版での掲載は省略した。なおこの資料を実見するにあたり、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館・竹田純子氏にご尽力いただいた。
- 3) 東北芸術工科大学北野博司氏のご教示による。
- 4) 東北芸術工科大学北野博司氏のご教示による。
- 5) 東北芸術工科大学北野博司氏のご教示による。
- 6) 第6図については東北芸術工科大学北野博司氏のご教示に従い作図した。

引用文献

- 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
- 尾野善裕 2001 「東海地方における須恵器製作技術の転換とその背景」『古代の土器研究会第6回シンポジウムレジュメ』古代の土器研究会
- 利部修 1998 「東北以北の双耳環と環状凸帯付長頸瓶」『研究紀要第13号』秋田県埋蔵文化財センター
- 柏倉亮吉・伊藤忍 1970 『平野山古窯跡群』寒河江市教育委員会
- 上山市教育委員会 1983 『上山久保手窯跡発掘調査報告書』上山市教育委員会
- 北野博司 2001a 「須恵器の風船技法」『つばとかめのつくりかた 北陸古代土器研究第9号』北陸古代土器研究会
- 北野博司 2001b 「須恵器成形方法研究の現在と課題」『古代の土器研究会第6回シンポジウムレジュメ』古代の土器研究会
- 笹沢正史 2001 「須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡」『つばとかめのつくりかた 北陸古代土器研究第9号』北陸古代土器研究会
- 佐藤禎宏・佐藤潤子 1971 「酒田市願瀬山第4号窯古窯跡」『山形史学研究第7号』
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 中村浩 1993 「須恵器の編年」『季刊考古学 第42号』雄山閣
- 檜崎彰一 1961 「土器の発達」『世界考古学大系第4巻 日本Ⅳ』平凡社
- 平尾政幸 2001 「須恵器製作技法の検討にむけて」『古代の土器研究会第6回シンポジウムレジュメ』古代の土器研究会
- 山形県教育委員会 1991 『山谷新田遺跡・山海窯跡群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第170集
- 山形県教育委員会 1992 『山海窯跡群第2次・山楯7.8遺跡・山楯榎跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第172集
- 山形県高畠町教育委員会 1997 『町内遺跡発掘調査報告書（3）』山形県高畠町埋蔵文化財報告書第5集
- （財）山形県埋蔵文化財センター 1994 『山楯3.4.5遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第4集
- （財）山形県埋蔵文化財センター 1998 『平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
- （財）山形県埋蔵文化財センター 2001 『泉森窯跡・坂の下遺跡調査説明資料』山形県埋蔵文化財センター
- （財）山形県埋蔵文化財センター 2002 『泉森南窯跡調査説明資料』山形県埋蔵文化財センター
- 横山浩一 1959 「手工業生産の発展」『世界考古学大系第3巻 日本Ⅲ』平凡社